



えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO えど友

第105号
平成30年
(2018)
9 - 10

江戸東京博物館友の会会報

目次	150年前一存亡の淵に立っていた江戸(東京) ……1~2 友の会セミナー 「朝鮮通信使と雨森芳洲の功績と思い」 ……3	三部会って何してるの?—広報部会の巻 ……7
	えど友広小路 ……4~5	見学会「赤穂四十七士の凱旋コースを歩く(前半)」 ……8
	会員からの投稿「家康、関東移封前後の建造? 府中・徳川御殿」/えど友サークルだより/館蔵古文書翻刻だより/友の会めも/催事のお申込方法	えど東京一景(12) 一芝 大門 ……9
	『えど友』100号記念投稿「東京風景いまむかし」 ……6 「ちょっと立ち寄り・銀座一丁目の旧アパートマン」	江戸博クリップ「休館中につき」 ……9
		江戸名所図会を歩く…③⑨ [筑土八幡宮から赤城明神社] ……10
		えどはく探訪 「江戸の出版界を華やかに彩る絵草紙屋」 ……11 催事案内 ……12



150年前一存亡の淵に立っていた江戸(東京)

今年は、明治改元や東京遷都から150年がたちます。150年前の1868年(慶応4年、明治元年)は激動と波乱の年でした。この年が明けた頃、世の中はどちらに動くのか、朝敵になった徳川家が盛り返すのか、それとも新政府の時代が訪れるのか、先行きは全く分からず、江戸はかつてないほど治安が悪化していました。西からは新政府軍が錦の御旗を掲げて進撃してきており、江戸は火の海になってもおかしくない状況になりましたが、西郷隆盛や勝海舟らの働きで平和裏に江戸城明け渡しが終わって、現在の東京の大きな礎となりました。

戊辰戦争

前年の10月14日に15代将軍慶喜が大政奉還し、その年の12月9日に明治天皇による王政復古の大号令が出されています。その大号令で世の中は治まることが期待されましたが、12月25日に旧幕府軍の庄内藩が江戸の薩摩藩邸を焼き討ちにしたのを皮切りに戊辰戦争が始まりました。つまり、新政府軍の討幕派が望んでいた武力対決という局面になってしまったのです。その翌年、慶応4年1月の鳥羽・伏見の戦いで新政府軍は圧勝、4月には江戸城の無血開城となりましたが、西郷隆盛との交渉が決裂した場合に備え、勝海舟は江戸の焦土作戦という背水の陣を敷いていました。結果は無血開城となったのですが、江戸は新政府の思惑通りの平穏な都市にはなりません。新政府に不満を持つ旧幕府脱走兵や幕臣、譜代藩士、さらに農民、商人たちが兵力不足の新政府軍に対し頑強な抵抗を続けたからです。

江戸が新政府軍によって制圧されたのは5月中旬の上野戦争の結果でしたが、世情は依然不安定・騒然としていました。戦火の方は北へ動いていき、東北25藩が結んだ奥羽列藩同盟と新政府軍の戦いは新潟、会津戦争を経てさらに北上、翌明治2年3月の箱館戦争でやっと決着を見たのです。

動き出した新政府

明治天皇は、慶応4年3月に五箇

条の御誓文を発表、国の基本的な方針を示しました。内容は「公義世論の尊重」や「開国和親」でしたが、それに基づいて新政府は閏4月に具体的な政体書を発表、権力の中核となる太政官を設置し、立法・行政・司法の三権分立の考え方を初めて導入しました。この太政官制は『西洋事情』(福沢諭吉)や『聯邦志略』(裨治文 撰)などアメリカの制度を参考にしたものでした。初めは七官制でしたが、翌明治2年には二官六省制、



▲大功記大山崎之図(戊辰戦争)

さらに同4年には三院制とめまぐるしく変更しています。新政府内の混乱や試行錯誤がうかがえます。こうやりながら新しい日本は動き出したのです。

廃仏毀釈の猛威

江戸時代は寺請制で明らかなように、仏教が国教でした。つまり、神社や神官はお寺の支配下にあったのです。一方、キリスト教の信仰心も根強くあり、これと対抗するには、外国から伝来の仏教では間に合わず、古くからの天孫降臨神話を基とする天皇の親政と神道の国教化しかないと強く説く学者たちがいました。また、地獄や極楽といって民衆を脅して金銭を騙し取り、豪華な寺院を建てていた仏教界を非難する学者もいました。地方ではすでに、神道の国教化を始めた藩もあり、新政府は慶応4年3月に神道の国教化に基づいた**神仏判然令**を出します。この発令で燎原の火のように激しく瞬間に広がっていったのが、いわゆる**廃仏毀釈**と呼ばれた破壊活動です。特に標的にされたのは権現、八幡、金毘羅などの習合寺社で、比叡山延暦寺の日吉山王権現、奈良の興福寺、京都の石清水八幡、讃岐の金毘羅さんなど多くの寺社の建物、仏像、経典などが破壊・焼却されました。その激しさに驚いた新政府は神仏の「分離」であって、「破仏」ではないと呼び掛けましたが、その勢いは止まりませんでした。多くの所では住職のいない寺や道祖神、お地藏さんまでが破壊の対象になったのです。このときに、今でいう国宝級、重要文化財級のものがどれだけ破壊、遺棄されてしまったか、想像を絶します。以前のようですが、どこかの国のテロ集団が世界遺産的な建造物を破壊したというニュースがありました。日本でも同じことがあったのですね。

江戸を東京と改名

この年の1月に大久保利通が大坂遷都を言い出しましたが、保守派からの猛反対があり、たちまちその案を引込めています。その後、大木喬仁や江藤新平などが提出した「東西両都建白書」が、江戸派、京都派双方の言い分を立てていたため採用とな

りました。江戸時代に西の京都に対して、すでに江戸は江都とか東都などと呼ばれていたことも影響したのでしょう、西の「京」に対して、江戸を「東の京」すなわち東京と改名(7月)したのです。しかし、東と西に同じ首都機能が並び立つはずもなく、大坂遷都を言い出した直後に出された「江戸遷都意見書」(前島密)に大いに傾いていた大久保の東京遷都論が大勢を占めるようになりました。

なし崩し的に進んだ東京遷都

しかし、長い年月、天皇を身近に感じながら、自分たちの町こそが日本の中心だ、という京都の人たちは、東京遷都だけは絶対反対だったようです。それを、なし崩し的に進めようとした新政府の苦悩や動きが今と

に戻りますが、翌年3月には再び東京行幸をし、そのまま二度と京都に帰ることはありませんでした。このように正式な東京遷都の宣言がないまま、既成事実の積み上げにより遷都は成し遂げられたのです。人を介して送られ、大久保がすっかり感服した前島の「江戸遷都意見書」には、江戸は日本の中心である、江戸には多くの大名屋敷があり、そのまま官庁舎として使える、江戸の土地は広大で江戸湾は深い、など当時の大坂(浪華)と比べて長所が述べられています。興味深いのは、大坂は



▲前島密



▲武州六郷船渡圖 (明治天皇 東京行幸)

なっちは分かります。9月8日には元号が「慶応」から「明治」に改められました。その直後の20日、即位礼をあげたばかりの明治天皇(満16歳)が京都の御所を出て初めての東京行幸を行いました。京都から東京まで、総勢3千人、費用80万両もの大金をかけています。10月13日に江戸城に入った天皇は「江戸城」を「東京城」と改称しました。また、天皇行幸という歴史的な意味合いもあって、江戸の庶民に下賜金や、振舞酒を配るなど気配りをみせています。この天皇行幸は時代が変わりつつあることを一般庶民に広く知らせることに大いに役立ち、東京の町も静けさを取り戻していきました。この行幸のあと天皇は一旦京都

そのまま大都市として繁栄していくが、江戸はほっとけば東海の寒市で終わるだろう、と述べていることです。

このように二度も存亡の淵に立たされた江戸(東京)でしたが、火の海になって壊滅してしまうのを救ったのが無血開城であり、東海の寒市になり下がるのを救ったのが東京遷都でした。歴史が変わったかもしれない大きな出来事で、そう昔でもない150年前の歴史に名をはせた人々への思いを新たにしました。

—参考資料—

『日本の歴史(13)』牧原憲夫 小学館
『幕末・維新』井上勝生 岩波新書
『勝海舟』鶴澤義行 ごま書房新社

【取材】文：広報部会・福島信一

朝鮮通信使と 雨森芳洲の功績と思い

講師 桐原 総一さん (日本エココミュニケーション研究会員)



朝鮮通信使について

朝鮮通信使は、室町時代から江戸時代にかけて、李氏朝鮮から日本へ派遣された外交使節団のことです。正式名称を「朝鮮聘礼使」といいます。一般には、江戸時代に行われた交流を指すことが多く、今日は江戸時代の交流を中心にお話します。

秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役＝壬辰・丁酉倭乱)による中断と関係悪化の影響を受け、再開当初はギクシャクしていました。しかし徐々に室町時代のような友好関係を築くようになりました。

江戸時代を通じ、全12回行われた交流は、次のように分類できます。

1. 第1回(慶長12年・1607)～第3回(寛永元年・1624) ……国と国による「国交再開回復＝国際関係」の樹立
2. 第4回(寛永13年・1636)～第8回(正徳元年・1711) ……人と人による「民際関係＝民間交流」の確立
3. 第9回(享保4年・1719)～第11回(宝暦14年・1764) ……恒例遵守の安定期
4. 第12回(文化8年・1811) ……衰退期(対馬までで中断)

平成29年10月には、ユネスコの「世界の記憶」遺産に登録されました。そんな朝鮮通信使との交流を友好的に進めたのが、雨森芳洲です。

雨森芳洲について

雨森芳洲は、寛文8年(1668)近江国伊香郡雨森村(滋賀県長浜市高月町雨森)で医者の子に生まれました。しかし医者を継がず、17歳ごろ江戸へ出て木下順庵門下に入り儒学を学びます。

22歳の時、木下順庵の推薦で対馬藩に仕え、26歳で朝鮮方佐役(朝鮮担当部補佐役)として対馬国へ赴任しました。こうして生涯を懸けて取り組んだ朝鮮通信使との関わりが生まれました。36歳で釜山へ渡り、朝鮮の地理や歴史、ことばを学び、初めての日朝会話集『交隣須知』を著しました。62歳の時には、ハンブル・カタカナ両言語を併記した朝鮮語入門書『全一道人』をも著しました。

特筆すべきは、44歳で第8回、52歳で第9回の通信使来訪に加わり、真文役(漢文を正文とする外交文書

の解説・起草を職務とする役)として、対馬・江戸間を2度往復したことです。88歳で対馬において死去、長寿院へ葬られました。

著作から見た雨森芳洲の思想と思い

芳洲は儒学を志したときの心境を蘇東坡の言葉を引用して述べています。「医者人は人を費やすが学問は紙を費やす」。つまり、学問は人を育てる、朝鮮との関係を築くには誠信の交わりが大切である、と『交隣提醒』に書いています。誠信の交わりは、誠の心で接し、相手を尊重し正直であるということです。相手を理解することに努め、人情・風習・お酒についても、無理強いではなく相手のことを考えて対応することです。

『たはれ草』には、大国に生まれたからといって優越感を持つことはなく、小国に生まれたからといって卑下する必要はない、とも述べています。

同門の新井白石とは仲がよく、互いに尊敬し理解していましたが、立場の違いで時に言い争いをしたりしています。

朝鮮通信使と日本人との関わり

釜山を出発した通信使船は、下関から瀬戸内海に入り室津(兵庫県)ま

で行きます。ここで風待ちをして、数日間停泊しました。その間通信使は「御茶屋」に宿泊しました。大坂からは陸路で江戸まで行きます。途中の滋賀県野洲市行畑から彦根市鳥居本間は、後に「朝鮮人道」と呼ばれるようになった將軍専用道「吉道」を通りました。

一行は街道から眺める日本の風景に感動し、『海游録』(第9回朝鮮通信使の製述官申維翰の著書)などに書かれています。『海游録』には、申維翰との別れを惜しんで涙する芳洲のことも書かれています。ここにも誠信の交わりを大切にされた芳洲の気持が表われています。

通信使の行列は派手な格好であった上、大変賑やかでした。そのため見世物的な人気もありました。中でも楽隊(太平簫など珍しい楽器を使用していた)、小童(通信使などの世話役の少年。美男子が多かった)、馬上才(馬の上での曲芸)の三つは、評判を聞きつけた人々が押し寄せました。

とりわけ馬上才は絶大な人気があり、將軍様も見たいと駄々をこねたほどです。しかし、長旅の疲れに加え湿気の多い日本では馬がバテてしまって、何もなかったことがあったといいます。そのため、通信使の来る3カ月前に馬だけ江戸へ先送りし、気候に慣らすようにしました。

それ程人気であった馬上才を取り入れた祭が、毎年5月5日に行われる「京都市伏見区藤森神社駄馬神事」です。また岡山県牛窓の秋祭りで披露される「唐子踊り」や「だんじり巡行」も影響を受けた祭と思われます。また、当時は朝鮮通信使を型取った人形もたくさん作られ、売られるほど人気がありました。

朝鮮通信使の影響を受け、取り入れた祭礼などが、300年以上経過した現在でも行われていることは、文化交流・民間交流の息の長さを感じます。

レポーターからひとこと

將軍が見た馬上才は、享保4年に行われたものです。セミナー終了後、翻刻チームの人から、『馬込家文書』に書かれている、と教わり確認しました。参加者119人。

【記録】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・前田太門



会員からの投稿

家康、関東移封前後の建造？ 府中・徳川御殿

横島利明

私は神奈川県相模原市在住です。少し遠いですが、江戸東京博物館には以前から度々足を運んでいました。その際、橋本から京王線で府中市を通過します。その府中市の府中市郷土の森博物館で今年の1月から3月の間、開館30周年記念特別展「徳川御殿@府中」が行われていました。

府中市の中心部に「御殿地」という徳川家康が鷹狩の際に休憩・宿泊した御殿の跡地と伝承されてきた所があります。ここで、平成20～23年の発掘調査の際、戦国時代末から江戸時代初頭の遺構、遺物が発見され、三葉葵紋の鬼瓦が出土したことから徳川將軍家の御殿であったことが証明されました。

天正18年(1590)、小田原北条氏を滅ぼし、奥州仕置後京都へ帰る途中の秀吉のために府中に宿泊・休息施設が建設されました。従来は家康が秀吉を饗応するためと思われていましたが、近年は秀吉が自ら造らせたとみられています。天正18年というと、家康の江戸城普請着工以前に既に造営されたこととなります。

府中は東海道と北関東・東北を結ぶ南北道の経由地に位置付けされたため、秀吉の旅程に合わせてここに建設されたといわれています。ただし、この奥州仕置の帰路に秀吉が府中を経由した確証は無く、翌年奥州が再び不穏な情勢となった際、出陣を命じられた家康と羽柴秀次が対面した時に利用されたのは確実とされています。

府中御殿は徳川將軍家が江戸を中心に各地に造営した御殿のうちの一

つですが、成立が豊臣政権下にまでさかのぼる点が特筆されます。

家康が鷹狩を好んだのは有名で、將軍職を秀忠に譲って大御所となり駿府を居城としてからも、秋には武蔵・相模・下総などで鷹狩を楽しんだとされています。家康が利用した御殿・御茶屋は60近くあるといわれていますが、慶長13年(1608)9月、同15年10月の2回は府中御殿を利用したのは確実です。毎年のように鷹狩に興じていることからすると、これ以外にも訪れていた可能性もあります。

この御殿が徳川將軍家ゆかりの建造物ということと、家康の江戸城及び江戸の街の開発以前に造営されていたことから戦国期を知る上でも重さを感じます。この御殿は正保3年(1646)に焼失し、再建されることはありませんでした。

府中御殿に関する研究は始まったばかりともいえ、平成29年12月からは史跡公園の整備事業も進められています。今後、関心が高まっていくと思われます。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

6月21日(木)月番松原良さんの案内で「ひらい圓藏亭」を訪れた。「ひらい圓藏亭」は江戸川区平井に住んでいた8代目橋家圓藏師匠の自宅を江戸川区が買い取り、一般公開している。1階の和室には座布団に座った圓藏師匠の等身大の写真が飾られ、2階には着物、履物、トレードマークのメガネと写真が展示されている。当日は和室でDVD「七面堂」「らくだ」「芝浜」を上映していただいた。参加者20人。

7月18日(水)月番島田昭さん。お江戸両国亭で「女流講談なでこくらぶ」を鑑賞。神田すずさん、宝井琴柑さん、神田織音さん、宝井一凛さん、神田すみれさん出演の怪談特集で、リズムカルな口調と歯切れの良さを十分堪能した。参加者18人。

◆藩史研究会

6月8日(金)辻井清吾さんの発表。伯太藩は和泉国和泉郡伯太周辺(和泉市伯太町)を領有した藩である。初

代藩主は渡辺基綱で、藩庁は伯太陣屋。元禄11年(1698)武蔵国内の領地の一部を近江国に移されたのを機に、基綱は和泉国大鳥郡大庭寺(堺市)に陣屋を構え、1万3千石で大庭寺藩を立藩した。さらに享保12年(1727)陣屋を伯太に移し伯太藩が成立。その後9代まで143年間続き、明治4年廃藩置県で伯太県となった。参加者13人。

7月13日(金)國定美津子さんの発表。浅尾藩の蒔田氏は備中国賀陽郡(岡山県総社市)に領地を持ち、江戸初期と幕末期だけが大名で、その間は交代寄合の旗本だった。しかも、初めは外様だったが再度立藩後は譜代扱いという珍しい大名である。参加者12人。

◆「米屋中家明治日記」を読む古文書の会

6月14日(木)米屋久右衛門の「日記」明治7年4月7日～5月9日。参加者8人。

6月28日(木)「日記」明治7年5月10日～6月12日。地租雑税の延滞について達しがあった。皆済期限を5月17日とし、未納金100円に対し1カ月50銭の加息。4カ月目には身代限り(醸造税・油絞税などは3カ月目)という。身代限りとは強制執行により全財産を提供させ負債に当てさせることで、現在では考えられない取立ての厳しさに驚く。参加者7人。

7月12日(木)「日記」明治7年6月13日～7月20日。参加者9人。

7月26日(木)「日記」明治7年7月21日～8月27日。参加者7人。

◆『江戸名所図会』輪読会

6月21日(木)3月に東叡山寛永寺を担当した下永博道さんが、解説の足りなかったところを再度発表した。難しい言葉の意味をまず確認した。輪王寺宮の詳しい説明と、上野東照宮の銅灯笼に刻まれている御三家の順番の理由や武家官位の使い方などが解説された。参加者16人。

7月19日(木)大澤憲一さんの担当。現在の西日暮里4丁目、上野から続く丘陵の一面はかつて道灌山と呼ばれ秋の頃は虫聴きの場所として有名だった。根津神社は6代將軍家宣の産土神として5代將軍綱吉により宝

永3年(1706)造営された。戦災に遭わなかったため当時造営された建造物は現存し、国指定重要文化財となった。参加者15人。

◆日本の大道芸伝承会

6月13日(水)発声練習の後「玉すだれ」や「がまの油売り」「ろくま」などを稽古した。参加者2人。

7月11日(水)発声練習と稽古をした。3月、9月の彼岸前後に恒例となった深川江戸資料館主催のイベント「江戸の物売り」と大道芸が観客に飽きられないようにするための工夫を皆で考え実践するために意見を出し合った。参加者2人。

◆江戸を語る会

6月30日(土)須賀靖さんが哲学者九鬼周造の著した『いきの構造』を基に「粋と野暮」を発表した。参加者5人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

6月24日(日)京成本線京成佐倉駅に集合。佐倉城址公園内を散策・見学した。主なところは、椎木門跡、二の丸御殿跡、天守閣跡、銅櫓跡、東京鎮台佐倉営所病院跡の碑、堀田正陸公像などだが、この日のハイライトは銅櫓跡。太田道灌が江戸城内に造った静勝軒を後に家光から土井利勝に賜わり、利勝が佐倉に移築し銅櫓としたとされている。この佐倉城址公園を出てすぐの「くらしの植物苑」に寄り、見学・休憩後、佐倉城址公園センターを見学、大手門跡、佐倉藩校跡の碑、佐倉武家屋敷などを見学した。参加者21人。

6月28日(木)1回目とほぼ同じコースを巡った。参加者28人。

7月休会。

◆文士散歩

6月16日(土)「本郷・菊坂周辺を歩く」を実施。本郷三丁目駅に集合。文士石川啄木が失意の時期に間借り生活をした理髪業「喜之床」を見る。坪内逍遙旧居跡、後の正岡子規、高浜虚子他の寄宿舍「常盤会」跡を見る。菊坂から鋸坂へ向かい、金田一京助・春彦旧居跡、菊坂の樋口一葉、宮沢賢治の旧居跡などを散策。そして多くの文士たちが住んだ菊富士ホテルの跡地へ。胸突坂を通り一葉が通った旧伊勢屋質店の外観を見つ、明治時代の下宿屋「鳳明館」を見る。参加者8人。

7月21日(土)「一葉の影を追いながら～文士樋口一葉を歩く」を実施。三ノ輪駅から、多くの遊女の霊を慰める浄閑寺へ向かう。次に目黄不動として知られる永久寺。国際通りから一葉の大きな胸像と日記の自筆碑文のある千束稲荷神社へ。境内は『たけくらべ』にも登場する。龍華寺のモデルとされる大音寺で休憩し、最後に一葉記念館へ行った。参加者11人。

* * * *

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし、輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆A班「新古改撰誌記」

『新古改撰誌記』は主として五役の

勤め方に関する控書で全31冊からなり、「巻之一」から「巻之六」までは寛政年間から幕末までの諸触達、伺書、願書や一件書などをまとめたものである。しばらくはこれらの中から比較的面白そうな話題を拾っていく。

享和元酉年(1801)11月に中間押・小人押(中間や小者を支配して行列を整える役目の足軽)連名で夫々の頭宛に願書を提出。「当番に当たった日には手弁当を用意して2人ずつ詰切りで泊りを勤める事になっている。ところが暑寒の節には腐ったり、冷めて固くなったりで弁当の用をなさないので、こういう場合には御台所を使わせてほしい」。同月24日より台所の使用許可が下りた。

友の会めも(開催日と人数)

平成30年6月～7月

◆役員会6月12日(火)16人。7月10日(火)15人。◆事業部会6月5日(火)16人。7月3日(火)18人。◆広報部会6月19日(火)13人。7月17日(火)11人。◆総務部会6月26日(火)16人。7月24日(火)13人。◆古文書講座 入門編：6月13日(水)午前82人・午後81人。7月4日(水)午前81人・午後85人。初級編：6月20日(水)午前71人・午後64人。7月11日(水)午前72人・午後61人。中級編：6月23日(土)午前43人・午後31人。7月21日(土)午前44人・午後32人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト6月7日(木)A班8人。B班5人。6月28日(木)A班7人。B班5人。7月5日(木)A班8人。B班5人。7月26日(木)A班7人。B班5人。

催事のお申込方法

- ◆普通はがき(62円)に、①催事名(略名可)・開催日②会員番号(必須)③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
- ◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1 江戸東京博物館「友の会事務局」
- *「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。
- *お申込いただきますと、「受講票」を

お送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

- *いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。
- *「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは、なるべく事務局員出勤の火曜日から金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いします。
- *「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会長退任及び代行就任のお知らせ

この度、友の会会長の早川良躬氏から一身上の都合により会長の職を辞したいという申し出があり、6月12日の役員会で了承されました。今年度は副会長である現事業部会長、林正信氏が会長代行を務めます。

『えど友』100号記念投稿 「東京風景いまむかし」

ちょっと立ち寄り・銀座一丁目の 旧アパルトマン



▲奥野ビル外観



▲玄関ホールの手動式エレベーター

左右二つの建物が一体となったRC造。当初は6階建ての「モダン」な“アパルトマン”。設計者の川元良氏は、当時の同潤会で建築部長を務めた方といます。

このビルの魅力は、建物のデザインに加えて、「気軽に立ち寄れる」ところ。たくさんのアトリエやギャラリーが入り、今、若い人たちに盛んに活用されています。すっかり風格がついた古い階段をのぼり、狭い廊下を巡りながら、テナント各室の展示をふらりと見せてもらうのは、なかなか楽しいです。



▲二つの建物の「隙間」もなかなか味がある

小笠原広樹

晴海通りの三原橋地下街があったところから北に向かうと、銀座一丁目に入ってほどなく、左手に古いビルがあります。通り過ぎてしまいましたが、歩道沿いには大きな丸窓のアンティークショップがあり、少し離れてみると、間違いなく戦前の、なかなか恰好のいい建物です。中に入ると、1階から最上階ま

ではすでに都内ではほとんど見られない「手動式エレベーター」が現役です。

この建物は奥野ビル。昭和7年から9年ごろの築で、



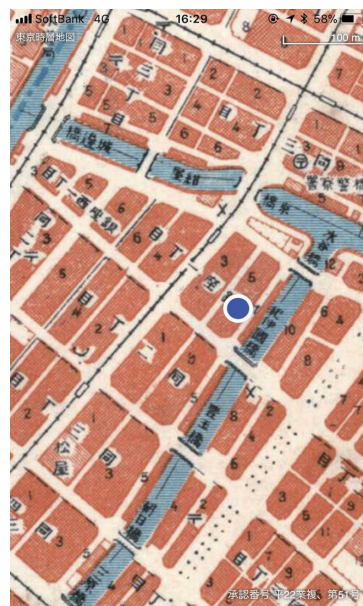
▲美容室だった306号室。正面控室の右手には円鏡が三つそのまましていたという「美容室」がたまたま残されていることに接し、「ここを維持しながら活用しよう」というグループが、家賃を負担しながら思い通りの企画を進めています。

もう一つ、このビルの前面には、終戦後にガレキ処理のために埋め立てられてしまいましたが、本稿出発点の三原橋地下街に通ずる「三十間堀川」が流れていました。アパルトマンの窓には川を渡る風が気持ちよく、上階からは佃島方面の海も見えただろうと想像できます…

都内にいくつもあった同潤会アパートも、平成25年、台東区東上野五丁目の上野下アパートメントの解体を最後になりました。奥野ビルは、いまでも残された昭和初期の「モダンな集合住宅」として貴重な建物で、少し昔の時間が漂う、佳きスポットです。



▲306号室で“CUBA, MEXICO, US”という銅版画の展示



▲丸印が奥野ビル（「東京時層地図・昭和戦前期」三十間堀川が残っている）



▲かつての同潤会上野下アパートメント（平成25年5月撮影）

三部会って何してるの？—広報部会の巻

友の会の活動を支えているのが事業部会・広報部会・総務部会という三つの部会です。各部会はそれぞれ次のような役割を担っています。

- ・事業部会：セミナー、見学会、特別観覧会、古文書講座など各種催事の企画・運営。
- ・広報部会：会報『えど友』の発行、ホームページで各種情報を公開するなど情報発信を担当。
- ・総務部会：会報・博物館情報の定期発送、総会・三部会等交流会の運営、サークル活動の管理。



今回から三部会が具体的にどのような活動を行っているかを順次紹介していきます。初回は広報部会です。

はじめに

現在、広報部会の部会員は13人(男性8人・女性5人)で、全員協力して会報『えど友』を作成しています。ただし、全員が顔を合わせるのは毎月1回行われる例会のみで、日常の連絡やデータのやりとりなどは全てパソコンのメールで行っています。また活動を円滑に行うため、編集長・副編集長・編集企画会議メンバー・ホームページ担当者などが置かれています。では『えど友』はどうやって作成されているのか、順を追ってご紹介します。

例会

例会では、まず次号の予定が検討されます。入稿スケジュール・記事タイトル・担当者名・原稿の進行状況などを確認し、問題点があれば対応策を協議します。次に催事予定と担当者を確認し、担当者未定であれば自主・互選により決めていきます。続いて以降1年間の誌面構成を検討し、記事未定の頁についてはアイデアを出し合って予定を立てます。

取材

取材方法は大きく分けて①友の会催事を取材するものと、②広報部会で独自に取材するものの二つです。独自取材のものにはトップ記事と各種企画記事(現在掲載中のものは「えど東京一景」「えどはく探訪」「江戸名所図会を歩く」など)があります。①の場合、催事の当日事業部会担当者に取材担当の旨を告げた上で、取材を行います。その他、セミナーでは講師への挨拶、見学会では下見会への参加などが必要となります。また担当内容は文章と写真撮影があり、1人が担当する場合と別々の人が担当する場合があります。②の場合は特

に取材日は定められておらず、担当者が適宜対象場所を訪れたり、参考資料に当たったりします。

原稿作成

原稿作成は一連の作業の中で最も大変な部分です。資料や録音などを十分に確認した上で、読みやすく分かりやすい文章を心掛けて書かねばなりません。また記述は「会報作成マニュアル」や『用字用語集』ののっとり行い、定められた文字数にまとめる必要があります。原稿は担当者から正副編集長にメールで送られ



て、一次校正に基づく修正を経て最終原稿となります。なお、セミナー原稿の場合はさらに講師に送られて、直しが入ることになります。また、掲載写真は担当者がキャプションをつけて使用数より多めに正副編集長に送り、その中から選択されます。

さらに、サークル活動報告書を元にした「サークルだより」、催事担当者の原稿などをまとめた「催事案内」が担当者により作成されます。この他広報部会員以外に原稿を依頼するものとして、「会員からの投稿」「館蔵古文書翻刻だより」「江戸博クリップ」などがあります。

編集

制作会社への入稿前に、編集企画会議メンバーによる会議が行われます。原稿の割り付け、サークルだよりの修正などを行った上で制作会社

へ入稿され、出来上がった初校誌面データが部会員に送られます。

校正

誌面の校正は部会員全員が行い、各自が校正報告用紙に記入して、編集長と校正まとめ担当者に送ります。全員の報告がまとまった段階で一覧表が全員に送られ、原稿作成者が校正内容に異議があるような場合は編集長に連絡をします。その後、編集企画会議メンバーによる最終校正を経て、最終校データが作成されます。以上の工程を経て『えど友』は印刷

され、納品次第総務部会により全会員へ発送されます。

ホームページの作成

『えど友』の記事のうち、見学会記事と10頁企画記事(「江戸名所図会を歩く」)については、写真を主体とした記事がホームページに掲載されます。担当者が選んだ写真に説明を付したデータをホームページ担当者に送り、これを担当者が画面構成しています。この他ホームページに掲載される内容は、『えど友』の最新版およびバックナンバー、友の会の活動紹介・お知らせ、江戸東京に関する展覧会情報などがあります。

おわりに

ここまで読まれて、作業が難しいと感じられた方も多いと思います。ただ私たちは編集のプロでもパソコンの専門家でもなく、いわば素人の集まりです。活動に慣れれば誰でも自然とできるようになっていきます。また、例会は和やかな雰囲気で行われており、その後の飲み会も大いに盛り上がります。活動を将来に引き継ぐためにも、様々なアイデアを出し合うためにも、新たに参加される方をお待ちしております。

文・写真：広報部会・菊池真一

赤穂四十七士の 凱旋コースを歩く(前半)



JR 両国駅東口に集合して小雨の中を見学会の出発です。赤穂四十七士が本所吉良邸で本懐を遂げた後、高輪泉岳寺を目指して歩いたコースの前半を歩くのが今回の見学会です。途中、芭蕉庵などいくつかの史跡に寄り道しながら歩く約3時間でした。

広大だった吉良邸屋敷

京葉道路を渡ると間もなく吉良邸跡があります。なまこ壁に囲まれた、面積29.5坪(約98m²)と狭い空間に上野介義央公座像、みしるし洗い井戸、吉良家家臣二十士碑などが並んでいます。元禄15年(1702)当時は2,550坪(約8,400m²)あったといわれています。当時の敷地に当たる地域を一周したら、ゆっくり歩いて10分位かかりそうです。



▲こぢんまりした吉良邸跡

コースには墨田区が設置した高札を模した説明板が至る所に見られますが、吉良邸表門と裏門の位置にもこれが設置されており、二手に分かれて討ち入ったその夜の光景を思い描くことができます。吉良邸裏門近くには、米屋を営みながら吉良家の動向を探ったという前原伊助宅跡の説明板もあります。

隅田川に沿って南下

浪士たちが入山を拒否された回向院の正門位置(当時)を確認して、徒歩で数分先の両国橋へ向かいます。討ち入り翌日の15日は、江戸在府の大名・旗本が将軍の拝謁を受けるために総登城する日でした。内蔵助は無用な争いごとを避けるため、両国橋を渡らず隅田川沿いを南下して泉岳寺に向かうことを決断しました。

早朝6時ごろと考えられています。

最初に渡ったのは豎川に架けられた一之橋です。堀部安兵衛や奥田孫太夫の剣術師匠である堀内源左衛門の門弟たちが待ち構え、本懐を遂げた義士たちに師源左衛門からの祝意を伝えたといわれます。早朝にもかかわらず、すでに討ち入りの情報が流れていたのでしょうか。さらに広重の「名所江戸百景・大はしあたけの夕立」が描かれた新大橋を右に見て進みます。御船蔵が立ち並んだこの辺りで負傷者のための駕籠を調達したそうです。

次に同じく広重が亀を大きく描いた「深川萬年橋」で小名木川を渡ります。ここは眺望がよく、絵の通り富士山がよく見えた場所ですが、まだ薄暗かったのでしょうか。小名木川、仙台堀、油堀と川や堀が多かったこの地域ですが、青く清らかな流れを眺めるほど明るくなっていなかったでしょう。現在堀は無く橋の名残だけの上之橋、中之橋、下之橋を通過して、永代橋に向かいます。

隅田川を渡り元浅野内匠頭邸へ

大高源吾の俳諧仲間、竹口作兵衛という人が永代橋近くで乳熊屋という味噌屋を営んでいました。浪士たちが差し掛かった時、一同を招き入れて労をねぎらい、甘酒粥を振る舞いました。ここから先の長い道のりを歩き続ける力を得たことでしょう。永代橋でいよいよ隅田川を渡ります。当時の永代橋は現在より上流にあり、永代橋に続いて日本橋川にかかる豊海橋を渡り、霊岸島に入りました。二つの橋の当時の位置を確認して、今



▲永代橋から豊海橋を望む

回は永代橋だけを渡りました。亀島川に架かる高橋を渡り、今は橋名標だけが残る稲荷橋へ。ここでは浅野家御用達の豆腐屋菱屋が討ち入りの報を聞いて感激し、湯漬けをごちそうしたというエピソードが残っています。さらに鉄砲洲を経て現在の聖路加国際病院の辺りに至ります。

同看護大学の横に「浅野内匠頭邸跡」の石碑があります。討ち入りの頃はすでに他藩の屋敷になっていましたが、浪士たちは万感の思いでここを通過したことでしょう。

ここから築地方面に向かいます。



▲間新六の供養塔

築地本願寺には、間新六の供養塔があります。引き上げの時、境内に金子を結び付けた槍を投げ込んで供養を頼んだという説があります。真偽は不明ようですが、昭和になって泉岳寺に改葬されるまでここに葬られていたのは事実のようです。

浅野大学屋敷跡付近で解散

築地から銀座方面へ向かいます。内蔵助が討ち入りを決意したのは内匠頭の弟、浅野大学による御家再興の望みが絶たれてからのことといえます。木挽町の浅野大学邸は現在の歌舞伎座の近くにありましたが、討ち入りの頃はすでに屋敷は引き払われていました。雨の日の午後は歌舞伎座前も比較的静かでした。12月開催予定の凱旋コース後半を歩く見学会は、ここが出発点となることを聞いて解散になりました。

参加者61人。

【取材】文・写真：広報部会・大橋弘依(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

えど東京一景

(12) 芝大門

都営浅草線の大門駅を出ると増上寺の大門が見えてきます。その先に、東京タワー、六本木ヒルズも見えます。「えど東京」を象徴するような一景だと思います。大門は赤い門で、門の中を車が通ります。珍しい光景です。大門は高麗門で、江戸城外桜田門と同じ構造の門です。かつてこの辺りは、増上寺の子院、学寮と門前町でした。大門に向かって左側は、片門前、中門前と呼ばれていましたが、昭和47年(1972)に芝大門に町名が変わりました。中門前に住んでいたことがあるので、この場所に来ると懐かしく思います。今はオフィスビルや飲食店が多く、にぎやかな所になりました。

大門は増上寺の旧総門のことで、歴史をさかのぼると慶長10年(1605)の家康による増上寺大改修時に江戸城の大手門を移築して設けた門です。その後、火災によって焼失し、宝暦12年(1762)に再建されました。明治政府の土地令により大門は東京府に寄付され、東京府の所有となりました。現在の大門は、道路拡幅のため昭和12年(1937)に東京市が市民の寄付を募って従来の意匠のまま高さを1.5倍の5.25mにして、コンクリート造りで改築したものです。木造の旧大門は、両国回向院の表門として移築されましたが昭和20年の東京大空襲で焼失しています。

増上寺は、昭和49年ごろから東京都に境内整備の一



環として大門の譲与を求めましたが、記録紛失により「財産目録にないものは譲与できない」とされ、長らく所有者不明のまま放置されていました。平成28年3月に大門は東京都から増上寺に返還され、5月に港区登録文化財になりました。平成29年に80年ぶりの大改修で耐震補強・外観の化粧直しが行われました。

【取材】文：広報部会・前田太門／イラスト：同・福島信一



江戸博クリップ

休館中につき

私は平成29年5月から管理係に勤務している者です。管理の仕事は初めてで、面接でも「今までの仕事と違うけど本当にできるのですか？」と念を押されたくらいでした。しかし、係内にミュージアム勤務経験の長いベテランの職員が二人もいたおかげで、しっかり教えていただき、こうして働き続けられています。この場を借りて感謝を申し上げます。

管理係はいろいろな仕事がありますが、私は主に施設管理の仕事をしています。その中で館内の張り紙などの修正対応をしています。外構サ

インの修正をしているとよく博物館を通り過ぎる人に話しかけられたりします。そこでのエピソードを一つ。

臨時休館となったときの仕事が「休館日」と書いてあるものを「休館中」とすることでした。対応していると心配そうに「いつまで休館なの？」と聞かれることがたびたびありました。このような人は江戸博が好きなんだろうなと思いました。そのように話しかけると「早く開館してほしい」と思うようになりました。開館前日、外国人カップルが「Was this museum closed?」

管理課管理係 星野美和子 (ほしの みわこ)

と聞いてきました。いつもだったら、ご足労かけてしまったことに謝るところですが、明日開館なので「Tomorrow, Open!」と言いました。私はそう言えるのが嬉しく思いました。

開館するとますます外国人観光客が多くなったと感じます。今回、注意書きについては四カ国語対応になりました。日本に来て江戸博に来ることを選んでくれたお客様が少しでも快適になればと思います。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

【筑土八幡宮から赤城明神社】



筑土八幡神社の庚申塔

39

今回は神楽坂の周辺を巡ります。外濠沿いの斜面に多くの坂がある地域です。歩いたのはアジサイが例年より早く色づいた5月末から6月上旬にかけてでした。

筑土八幡宮から神楽坂

J R中央線飯田橋駅下車。東口から飯田橋を渡って大久保通りを進むと、五叉路の向かいに筑土八幡宮(現筑土八幡神社)の鳥居が見えます。石造明神型の鳥居は享保11年(1726)建立で、新宿区内最古のものです。長く続く石段の先にある社殿は戦災で焼失しましたが、戦後再建されて往時の姿を留めています。また境内には桃の木を持つ2匹の猿という珍しい図像の庚申塔があります。かつては八幡宮と並行する形で津久戸明神社(現筑土神社)がありましたが、戦後千代田区九段へ移転しています。

社殿脇から裏へ抜けると、御殿坂の上へ出ます。坂名はこの辺りが御殿山と呼ばれたことに因んでおり、3代將軍家光が鷹狩りの際に仮御殿を設けたと伝わります。

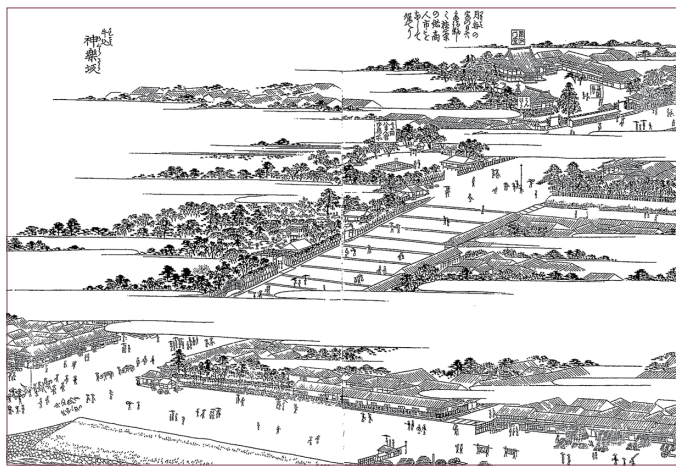
坂下から神社向かいの三年坂を上り、途中で左折していくと軽子坂の下りになります。坂下の飯田濠沿いに揚場(船荷を陸揚げする場所)があり、軽籠(縄で編んだもっこ)で運搬する人夫(軽子)が付近に多く住んでいたことから、この名が付けられました。坂下から外堀通りを渡ると戦後飯田濠が埋め立てられた跡に造られた「せせらぎの公園」があり、濠と揚場の様子が再現されています。水

は流れていませんが橋も架かっており、坂正面のけやき橋脇には「牛込揚場」の石碑が立てられています。

公園を右方向に進むと牛込橋があり、橋の先には牛込御門跡の石垣が残されています。引き返すと正面が神楽坂の上りで、長く続く神楽坂商店街は多くの人で賑わっています。江戸時代には今よりも急坂で、挿絵を見ると段坂になっていることが分かります。また、絵の中には軽子坂や揚場の様子も描かれています。

若宮八幡宮から牛込の城址

坂の途中から小栗横丁に入って突き当たりを左に折れると、源頼朝が創建したと伝わる若宮八幡宮(現神楽坂若宮八幡神社)があります。通りに並行して参道と社殿がありますが、脇にマンションが建っていてかなり窮屈そうです。境内に入ってみると建物の1階が社務所で、社殿の下が駐車場になっていました。神社脇から下るのが庚嶺坂で、付近に梅の木



▲長谷川雪旦：牛込神楽坂

が多かったため2代將軍秀忠が中国の梅の名所になぞらえて名付けたといわれますが、行人坂・唯念坂・幽霊坂・若宮坂などとも呼ばれます。ツタに覆われた壁のある急坂で、実に風情があります。

外堀通りに出て次の角を右に入ると、今度は逢坂の上りになります。奈良時代に武蔵守となった小野美佐吾と、この地の娘さねかずらの恋物語が坂名の由来です。なお図会ではこの坂と先述の軽子坂を混同して、同一の坂としています。さて坂を上ろうとしてふと右手を見ると小さな社があり、何と幟には移転したはずの「筑土神社」の文字が！ そばに寄っ

て張り紙を見ると、九段にある筑土神社の飛地社で「船河原筑土神社」というそうです。また神社前には継子いじめの伝説が残る「掘兼の井」の説明板があり、すぐそばの井戸があった場所には現在防災井戸が設けられています。

坂上から道なりにしばらく進んでカーブの手前を右に折れると、右手に光照寺があります。この一帯は上野国赤城山の豪族大胡氏を祖とする牛込氏の居城があった所で、主君の北条氏滅亡後に廃城となり、その跡に寺が移転してきました。痕跡は全く残っていませんが、境内には「牛込城跡」の説明板が立てられています。

薬龍山正蔵院から赤城明神社

光照寺前の地蔵坂を下って神楽坂に戻り、少し先から左手の朝日坂がある通りに入ると、すぐ薬龍山正蔵院があります。しかし見た目は普通の住宅で、門柱に寺名の表示がなければ見落としてしまいそうです。

入り口は閉まっており、ブザーを押しても全く反応がありません。ガラス戸に目を近づけると、「草刈薬師」と呼ばれる本尊の薬師如来像が見えました。

さらに坂を進むと右手方向に赤城明神社(現赤城神社)の鳥居が見えます。先ほどの大胡氏が牛込に移住の際に、上野国赤城神社を勧請したと伝わります。ゆるやかな石段の先にある拝殿

は全面ガラス張りのモダンな建物です。その前には狛犬がこれまた斬新なデザインで、まるで獅子のようです。横顔はちょっとマーライオンを連想させます。さらに右手を見ると、何と「あかぎカフェ」というおしゃれな喫茶店までありました。石段脇には出世稲荷神社などの境内社があり、こちら側から出ると赤城坂があります。ここから東京メトロ東西線の神楽坂駅に向かいました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：

広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

江戸の出版界を華やかに彩る絵草紙屋

江戸ゾーンの3番目には、「出版と情報」の展示があります。江戸時代、京都や大坂の上方を皮切りに、江戸にも初めて「出版業」という経済活動を目的とした新しい出版文化が華開きました。今回は、地本や浮世絵の展示を見ながら、それらを販売していた絵草紙屋の役割をのぞいてみます。

江戸独自の「地本」

江戸初期の貞享(1684~88)・元禄(1688~1704)のころは、江戸の出版界は上方から進出した版元や書商の「出店」によって支配されていました。当初、上方では『源氏物語』などの文芸書や『好色一代男』などの浮世草子(好色本)、重宝記(実用書)などが出版され人気を博しており、これら上方産の本が江戸まで運ばれ売られていたわけです。しかし、上方の書物は運ぶのにコストがかかるため、次第に江戸でもその土地独自の出版物が作られるようになります。これが「地本」と呼ばれるものです。地本には、洒落本、草双紙、読本、滑稽本、人情本などがあり、大名や江戸幕府役人の氏名や家紋などを記した『武鑑』や吉原のガイドブックであった『吉原細見』などもその一つです。そして、地本業界を支える主力商品であったのが「浮世絵」でした。



▲十返舎一九作『東海道中膝栗毛』

浮世絵の誕生

浮世絵は、現代人の感覚ですと絵画と思われませんが、江戸時代の概念では木版で摺られる摺り物で、人々が気軽に買える出版物でした。菱川師宣(1618~94)が手掛けた1色の墨摺りの浮世絵は、やがて丹色を主に彩色した丹絵、2~3枚の色板で紅・黄・緑の色を摺り込んだ紅摺

絵などに発展していき、明和年間(1764~72)には鈴木春信(1725~70)による多色摺りの「錦絵」が登場します。錦絵は、地方では「江戸絵」とも呼ばれ、江戸を代表する土産品としても一世を風靡し、地本業界に大きな飛躍をもたらしました。

江戸博では、歌川広重の晩年の作品である錦絵『名所江戸百景』の1枚「亀戸梅屋敷」の制作工程を展示しています。



▲歌川広重作「亀戸梅屋敷」の制作工程

大まかな流れは、版元が出版物を企画し、絵師に依頼→絵師は、墨1色で版下絵を作成→版元は出版許可を得て、版下絵を彫師に渡す→彫師は、版木に版下絵を裏返して貼り、絵師の描いた線を残して彫る(版下絵ごと彫るので完成と同時に版下絵は消失)→出来上がった版木を墨で摺り、校合摺り(輪郭線のみ)の絵を作成→校合摺りを見て、絵師は彫師と摺師に色を指示→彫師は色版を複数作成→摺師が色を調整し、「見当」を頼りに1枚の紙に色を重ねて摺る。錦絵は、こうした多くの職人たちの共同作業によって出来上がりました。

絵草紙屋と和泉屋市兵衛の「甘泉堂」

「出版と情報」ゾーンでは、ひときわ華やかな絵草紙屋(模型)が目を引きまします。この絵草紙屋は、寛政9年(1797)の『東海道名所図会』に描かれた、芝神明前にあった4代目 和泉屋市兵衛(?~1823)の絵草紙屋「甘泉堂」を元に復元されたものです。当時、江戸には学術書などの専門書を出版する書物問屋と、一般庶民向けに浮世絵など主に娯楽的な作品、いわゆる「地本」を出版・販売する絵草紙屋(地本問屋)の2種類の本屋がありました。

壁一面に新版の錦絵(浮世絵)が吊るされ、下には草双紙が並べられ、



▲復元された絵草紙屋「甘泉堂」

子供用のおもちゃ絵などが平積みされている。錦絵などは、ぐるぐる巻きにして、店名などが摺られた包み紙にくるみ、顧客に渡される。店先には美人娘を置いている店もある、などなど…。これらが当時の絵草紙屋に見られる日常の風景だったようです。

絵草紙屋の主力商品であった錦絵(浮世絵)は、その時代の人気の歌舞伎役者の役者絵や相撲絵、吉原で評判の遊女の姿絵などが主で、絵草紙屋の錦絵を見れば、その時代の流行が一目瞭然でした。錦絵は、流行のファッション誌、ポスターやプロマイドの代わりとして、瞬間に庶民に広がっていきます。いわば、絵草紙屋は、彼らの広告塔でもあり、メディアとしての役割をも果たしていたのです。そして、何が流行るかを、いかに早く察知し、見所のある絵師を発掘して錦絵を作らせ、流通に乗せるかが、版元たちの腕の見せ所でした。版元で名高い鳶屋重三郎はいうまでもなく、この和泉屋市兵衛もまた名プロデューサーとして大成功した人物です。18世紀末に、市兵衛は、当時まだ新人の浮世絵師だった初代歌川豊国(1769~1825)を起用して「役者舞台之姿絵」という錦絵のシリーズものを発行します。これが大当たりし、豊国も人気絵師としての地位を築きました。市兵衛は、その後、往来物など教育系の出版なども手掛け、書物問屋としても明治時代まで繁栄を極めるのです。

参考資料：『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』鈴木俊幸、『江戸の出版事情』内田啓一

【取材】文・写真：広報部会・田辺友紀子

催事案内

古文書講座

◆9月から第2期を開講

すでに申込は締切っておりますが、9月から下記日程で第2期を開講します。

◆入門編 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)

●開催日：9/5(水)、10/3(水)、11/14(水)

◆初級編 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)

●開催日：9/12(水)、10/17(水)、11/21(水)

◆中級編 講師：吉成香澄さん

(豊島区教育委員会文化財保護専門員)

●開催日：9/22(土)、10/20(土)、11/17(土)

●時間：各講座とも

午前の講座は10時30分～12時30分

午後の講座は14時～16時

●会場：各講座とも飯田橋の

新陽ビル4階「リロの会議室 会議室A」

●定員：各講座とも80人(会員のみ)

●参加費：各講座とも全3回2,400円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

見学会

定番・江戸城周辺探訪 —その3(外濠)—

◆江戸城外濠は、江戸城外郭を「の」の字形の右渦巻き状に囲み、城下の防衛と商工業の発展の両方に応じる総構えを形成しています。外濠の天下普請は、家光の威信をかけた一大国家事業であり、これにより江戸城は城郭が完成したといえます。今回のコースは、御茶ノ水～市ヶ谷まで。現在も江戸の面影を残し、「国史跡江戸城外堀跡」となっています。所要時間3時間。解散JR市ヶ谷駅前。

●開催日：10月14日(日)小雨決行 受付後順次出発

●受付開始：12時30分 受付終了：13時 時間厳守

●集合場所：JR「御茶ノ水」駅聖橋口

●申込締切：10月4日(木)必着

●定員：150人 同伴者可(保険の都合上、はがきに氏名、住所・電話番号連記)

●参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】林 正信・山本 隆(事業部会)

広重『名所江戸百景』周辺探訪

—その19(南千住～日暮里周辺)—

◆広重『名所江戸百景』周辺探訪は、広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪する企画です。今回は、三ノ輪から南千住までと、日暮里から西日暮里までを歩きます。

す。千住大橋は隅田川に最初に架けられた橋で、奥州街道、日光街道などが通る交通の要所でした。その橋の上を頻繁に往来する旅人や荷馬を描いた広重「千住の大はし」絵や、桜の名所で、多くの花見客が宴を張り、長いはずの春の日も暮れやすいと惜しんだ諏訪明神社が鎮座する諏訪の台を描いた、広重「日暮里諏訪の台」絵などを訪ねます。所要時間は約3時間半、JR西日暮里駅で解散となります。なお、途中での一時解散は天王寺門前とします(最寄り駅は日暮里駅・所要時間約2時間半)。(今回、訪ねる広重の作品)「蓑輪金杉三河しま」「千住の大はし」、「日暮里諏訪の台」、「日暮里寺院の林泉」

●開催日：11月11日(日)小雨決行 受付後順次出発

●受付開始：12時15分 受付終了：12時45分 時間厳守

●集合場所：東京メトロ日比谷線「三ノ輪」駅北千住方面ホーム2番地上出口(上野・中目黒方面へのホームの場合は1a地上出口から歩道橋を渡り2番出口へ)

●申込締切：11月1日(木)必着

●定員：150人 同伴者可(保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記)

●参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

なお、京成千住大橋～京成日暮里間は京成線を利用します。この間の交通費(160円)は自己負担となります。

【企画担当責任者】山本 隆(事業部会)

「江戸東京たてもの園」を楽しむ(再)

◆荒天で順延としました見学会を、下記のとおり再び実施することにしました。季節こそ変われ、「秋のたてもの園」を心ゆくまでお楽しみ頂きたい、多数のご参加をお待ちします。

●開催日：9月23日(日)小雨決行 受付後順次出発

●受付開始：12時 受付終了：12時30分 時間厳守

●集合場所：江戸東京たてもの園入口

●交通アクセス：JR中央線「武蔵小金井」駅・西武新宿線「花小金井」駅からそれぞれバス5分、公園内徒歩5分(受講票に略地図を掲載)

●申込締切：9月13日(木)必着

●定員：100人 同伴者可(保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記)

●参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

企画展のご案内

●企画展 「東京150年」

会期：8月7日(火)～10月8日(月・祝)

会場：常設展示室 5F 企画展示室

休館日：9月3日(月)、9月25日(火)

好評開催中!

「催事のお申込方法」は、5ページに掲載しています。

会報<えど友>第105号

平成30年9月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

E-Mail: edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：林 正信(会長代行) 編集長：中村貞子

岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、小出雅右、横島利明、福田 徹

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910